

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'83 秋

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11
婦選会館内 〒151

振替 東京九一 一九一八九一

発行 一九八三年九月二四日

もっと大きな声で 男女平等、男女の自立を

中嶋 里美

男女平等の問題は職員会議の終り頃に遠慮がちに、誰をも刺激しない声で発言すべきことだろうか。組合会議のちよっとした時間に「よろしく願います」という問題だろうか。

私たちは今、男女の平等、生活的自立の重要性を主張するのに遠慮しすぎてはいないだろうか。

数年前、暴力事件を起した生徒に、「朝は何を食べているの」と聞いた時、「かき氷とココ

ア」という答えだった。非行は食べる物、話す言葉が自分を大切にしてない時に起る。

問題児といわれる生徒が、縫うという作業で示した積極性、男女の生徒が泣きながらぶつかり合って成長していく班学習……。

八月四日の全国交流集会は、私に家庭科教師になりたいという思いすら抱かせた。私たちはもっと大きな顔で、声で男女平等、生活的自立の大切さを主張しよう。さあ今から。

もくじ

もっと大きな声で男女平等、男女の自立を	(1)
授業参観のおしらせ	(1)
83年度全国交流会報告	(3)
報告・討論・感想・まとめ	(3)
文部省も「共学の時代」と認める？	(3)
最近の状況から	(8)
連絡会報告	(9)
世話人会報告	(10)
共修家庭科教育内容第一次試案	(12)
他団体では	(13)
家庭科教育研究者連盟・母親大会	(13)
女性史研究全国交流会・We	(12)
アジア地区家政学セミナー・PTA	(16)
事務局・プロフィール	(16)
資料紹介	(16)
性教育教材・「悲しみを裁けますか」	(16)

授業参観のおしらせ

日時 一〇月一九日(水) 一〇時半集合
三・四時間目参観 五・六時間目話し合い

場所 青梅・都立農林高校(東青梅駅下車)

内容 二年・男女共学「家庭一般」

授業者 樋口照子さん

参加費 三〇〇円

地図及び詳しい内容は別紙をごらんください。会員でない方もどうぞ。

一九八三年度全国交流会報告

（動き出した男女共修 今中学校で）

八月四日

みやこ荘

冒頭、すすめる会の半田たつ子氏から、会
発足十年を迎え、昨年の高校における男女共
修推進の集いに次いで、今年は、中学校で開
始されている技・家科の男女相互乗入れを
実りあるものとするため、本集いを活かしたい
とあいさつがあった。また、参加者は秋田、
山形を始めとする遠隔地からの参加があり、
また、学生の参加が目ざされたと紹介された。

〈報告1〉

「保育領域」の実践

東京武蔵野市立第四中学校
榎田真澄さん

同校は現在技・家科の全面共学を行って
いるが、数年前には校内の非行化が相次ぎ、荒
廃状況もあった。しかし、家庭科で取り上げ
る題材は、ジュース、ラーメン、喫煙など、
子どもの生活と切り離すことのできないもの
であり、家庭科担当者こそしり込みしない

教育と生活をつないで行く必要があると指摘。
共学家庭科の基本方針としては、(1)すべて
の生徒に生活力を、(2)すべての生徒に人間性
の理解を、(3)家庭や地域社会とのかかわりの
場を、(4)三年間の長期的見通しの上での指導
計画を、めざしている。

報告の対象となる「保育領域」では、
◆自分自身の理解 ◆家族との関係の理解 ◆幼
き者への理解 ◆人間性尊重の精神 をねら
いとし、1.人間の成長と発達 2.子どもの見
方や考え方 3.私の幼少時 4.家族史と私の
成長 5.幼児と環境 6.児童福祉 7.おやつ
の実習 8.幼児食の実習 9.絵本の製作 の
内容で単元を構成している。

とくに、生徒自身の目を通してみた幼児の
観察はみずみずしく、生き生きしたものとな
っている。単元の最後に取り上げる「絵本の
製作」は中에서도意義があり、日常なじんで
いる暴力肯定的なアニメーション表現が、「幼
児のためにどのような表現方法を用いたらよ

較させ、その違いのひとつを食品添加物への
関心に引きつけている。

この共修授業は、実習をふんだんに取り入
れているが、教科書との違いは、調理実習が
目的ではなく、調理実習を素材のひとつとし
て、食生活全体を考えさせる授業に発展させ
ていることである。

しかし、父母への技・家科についてのアン
ケート調査では、折角の共修が必ずしも周
知されていず、家庭科は一部共修でよいとい
う回答が相当みられることが併せて紹介され
た。

なお、氏は、班毎の学習を徹底しており、
共働的な制作（たとえば被服も）や、学習集
団づくりが、生徒の社会性を大きく引き出し
ていることを指摘し、参加者から注目された。

（佐藤 慶子）

明治大学から、会、あてに社会人特別
入試のおしらせが来ました。問い合わせ
先は明治大学法学部事務室（9時～15時
半）〇三・二九六・四一五一です。

同校は新設校のため、設立時から共学への
取り組みを開始することができ、八十年代か
ら開始して昨年は二学年の前期まで共修を
広げている。

〈報告2〉

「食物領域」の実践

東京昭島市立福島中学校
小川智子さん

「いか」を考えさせることによって、すっきり
別の表現方法となり、生徒自身の本来的な成
長にまいもどった無理のない童画的な世界が
表れる。

この学習によって、生徒は気持ちに落ちつき
を取りもどし、発達段階に沿った適切な題材
となっている。

会場には、作品も紹介され、中学生として
の無理のない保育領域に参加者の同感と呼ん
でいた。

司会

報告の部分 中嶋里美 芦谷 薫

記録

討論の部分 和田典子 小田亜佐子

午前

佐藤慶子

午後

石川由紀 梶谷典子

ま と め

今年の全国交流会をふりかえって簡単にま
とめてみたいと思います。

(1) 参加状況……参加人数は五十名余。一
日だけのプログラムでテーマを中学校の家庭
科に絞った点で、昨年よりも小規模となった。
みやこ荘の会議室を借りる時の人数の予想が
ほぼ当たった。

(2) 収支……昨年同様、参加費だけでは交
流会全体の支出をまかないきれず、会の予算
から補った。

収入 参加費 三六、〇〇〇円
支出 謝 礼 五四、〇〇〇円

会場費 二八、〇〇〇円
通信・印刷費 一五、〇九〇円

計

九七、〇九〇円

(3) 資料……昨年は事前に原稿を集め、世
話人会で編集・印刷したが、今年は準備上の
都合で当日報告者の方にそれぞれ持ち寄っ
ていただいた。

(4) その他……報告者として予定されてい
た三浦和子さん（保育領域）が都合で欠席さ
れ、各領域一人ずつの報告に変更になった。
昨年はじめて開かれた全国交流会の総括と
反省から、今年のテーマはいま中学校で家庭
科はどうなっているか、をとりあげようとい
うことになったわけですが、予想通り、まず
授業を始めることすら困難であることや、行
事に追われて教師にゆとりがないことなど、
中学校の抱える様々な問題があげられました。
ただ、思ったよりも現場、中学家庭科教師の
参加が少なく、むしろ大勢参加してくれた学
生の方たちと現場教師との対話といった討論
が活発でした。

テーマを絞った分、参加者が減る形となり
ましたが、また来年以降全国交流会を開くと
すれば、その性格づけが問われましょう。と
にかく顔合せをして懇談会、という段階はす
ぎたと思われず、交流会ですから実践報
告会とも違うはずですが、ユニークな会を
望むと準備にも手間どりがゆいかなので
が、（今年実は案としてあった）地域の個性
に基づいて関西なり東北なりの府県で全国交
流会を開くなどはいかがでしょうか？ と
すれば東京中心になりがちの今日です。

（小田亜佐子）

〈報告3〉

「住領域」の実践

元川崎市立橋中学校
持田ナミさん

(1) 共修実現の経過

共修家庭科の実現の為に、まず家庭科のアピールをした。例えば職場の教員に対しては生活に役立つプリントの配布とか、家庭科での作文の紹介をしたり、校長との話し合い、技・家部会やPTA総会等、機会ある毎に生徒の現状や家庭科教育について発言をした。

次には教科部会で共修の必要性・学習の具体案を提案し検討、教科内の意志統一をはかった。続いて教科主任会へ提案・説明し、承認を得、職員会議に於いて決定をみるに至った。又、各家庭へもその旨を通知した。

(2) 学習計画

初年度と次年度は一年生のみ共修とし、全96時間中被服12・食物21・整図木工33の66時間を共修、被服30を別学としてスタートした。三年目には二年生迄、四年目には三年生も共修という積上げにより、全学年を通して共修が実現した。

(3) 住領域の学習について

住領域の学習と学区の住生活の現状とは不可分の関係にある。そこで本学区の住生活を簡単にみてみると、

- ◆急に都市化した地域で核家族の勤労者が多く、家族数四人が60%余である。
- ◆団地サイズの六畳間が一番広いためか視力1.0未満の子が全国平均より6.2%も多い。
- ◆公営・民間アパートに住む者が63%、持ち家・社宅等にしても大差ない広さである。
- ◆母親の殆んどはパートか内職で働いている。

このような中で、住環境の影響から起ると思える家庭崩壊や子どもへの心身の歪みが深刻である。そこで授業のねらいを次の四点に置いて学習内容と時間割を作成した。

1. 身近な地域や住まいの現状を知り、問題点をとらえさせる。
2. 住まいの働きを知り、健康で文化的な生活が出来るための必要条件を理解させる。
3. 川崎市の住宅や居住環境の問題点を知り市政は改善向上の為にどのようなことをしてきたかを知り、住まいや居住環境をよくするためには、多くの人が協力と行動が必要であることを理解させる。
4. 家族がどのように生活したら現状の住生活よりよくできるかを考えさせ、身近なこ

保科達子さんの感想

教育現場における中学生の荒れ、とくに女子生徒のひどい変容という報告が、さまざまのすぐれた実践とないまぜになつて重く心に残る集会でした。

先生方の「思い」が先行せざるを得ない実態を伺いつつ、「どんな力をつける教科か」ということを改めて深く考えねばならぬと思ひ続けて居りました。

(私立短大教師 家庭科教育法担当)

とから解決させる。

(4) 学習の成果

男女一しょに住生活を考えたことにより、生活は男も女も協力して解決していくことであり、共に現状を知り生活をみつめ、問題点をつかむ機会になった。又個々の住生活は個人的なものだけではなく、国の政策につながっていることが理解できた。

その他の成果として、家庭科教師が学活だけの先生から、授業もやれる先生ということとで学級経営がやり易くなった。又女子のみということで欲しい時間がもたらえなかったり、課題を出しづらい面があったのが改善された。

〈報告4〉

「被服領域」の実践

高槻市立第四中学校
森 陽子さん

(1) 学校生活の内情について

今マスコミ等でいわれているような、いわゆる校内暴力についていえば、この学校でも全部当てはまるといういい位である。教室に行くと一人も生徒がいない。どうしてかたずねると、教室に入らない生徒を呼びに行つて、又その子という風に教室に入らなくなる。非行その他は小学校の頃から始まっているといわれているが小学校と中学の違いは

市本裕子さんの感想

今、大学三年生であり、現場の実態が全くわからない状態であるが、この会に参加させていただいて、非行について、また、共修した上であった問題点など大変勉強になった。

大学の講義と、現場において必要とされているものとのちがいを感ずる。

(茨城大学教育学部)

どこかというところ、小学校では学習面のみならず生活の中迄教師が関わりを持っているが、中学では担当教科の枠に限られてしまう。それではどうすれば生徒をつかめるか。よくみると何かをやるだけの力も生活力もあるのがわかったし、集団としての団結力も強い。そこで学習は班活動に重点をおくことにした。

共修ということについていえば赴任した時にはすでに全面共修だったが、校内の乱れのため、H・Rに切り換えざるを得ない時もあった。計画通りの授業はできていない。そんな中で次のような取組姿勢を考えた。

- ◆主体的に学ぶ姿勢をもたせる(興味をもたせる工夫)。自分の着ている物に関心をもち学習と実生活を結びつける。
- ◆集団として高まりあえる学習を組織する。班学習を中心にすすめる。
- ◆実習を通して学習できるようにする。
- ◆生徒ひとりひとりと関わる。

(2) 学習計画(被服I)

1. 被服の材料——布・糸・繊維について理解を深め、人間が原始から発展させてきた技術を学ぶ。
2. 被服の着方——被服の役割を理解し、健全な着方を追求する。

3. 実習——手の働きを巧みにし、生活に生かす物を作る。作る喜びを味う。グループで協力する。

4. 班研究——班活動をする。被服について関心ある事を調べたり考えたりする。

(3) 実践の中で

管理され続けた生徒達の無力感というのは大変なもので、生活に密着した、生活の中で活かせるような授業をと考えても、受け付けてくれないというか授業は授業、現実には現実と分けてしまう。例えば被服の着方の項で身近な制服のことを考えさせても、学校で決まっているから仕方がないで終ってしまい、制服を変えようとかやめようというような展開にはならない。こちらから水を向けても、自分達が何を言っても通らないとあきらめてしまつて、せいぜいちょっと違反をして抵抗するだけで、生徒の無力感は現実に反映されないことへのあきらめからきていると思う。しかし運動会の衣裳作りやきんちゃく袋など実習の時間は実に活々とし、アイディアを凝らしている。このようなことから、これから生徒が成功感を味わえるような授業づくりを、生活に根ざした学習していきたい。

(石川 由紀)

討 論

姫路の高寄さんから調査結果の報告（7ページ参照）があったあと、各地の状況について次々に発言がありました。

◆ 一番大きな話題になったのは、教師になろうという人がこどもの実態を知らないこと。

「授業というものはこどもと教師のかかわりの中で進めなければいけない。そのことはきょうの報告でもよくわかった。それなのに大学ではこどもぬきで教材研究が行われている」「現場で教生をあずかってみると、大学でやって来た教材研究が役立たないことがわかる」「学生に今のこどもの状況を話すと、『そんなことない』という顔をすると、その実態の報告があり、教員養成のあり方を考えるべきだと話し合いました。

「附属でない公立校で生徒と接してみなければいけない」「保育所や老人について調べることなどを学生に課してはどうか」「地域でのこども会などにボランティアで来てくれるのは男子学生ばかりだが、女子学生もそういうところへとびこんでほしい。夏休みにはプールの監視などの仕事もあるし、探せばア

Eさんの感想

女子のみ中高六カ年の私立校に勤務しておりますが、家庭科教育でめざすものは、男女を問わず、変わらないと確信しております。

日頃、女子のみを相手にして、暗中模索しているところですので、共修をすすめていらいっしやる先生方の実践から、ぜひ何か

ルバイトでもボランティアでも体験の機会はいろいろあるはずだ」「家庭教師などやってこどもと接している学生の書くレポートは鋭い。学生も生きた現実を知るように努力してほしい。教える側も考えなおさなければ」などの提言がありました。

◆ 共修のすすみ具合については、校長の反対などでなかなか進まない例もある一方、「調理実習など男子のほうが熱心で、勉強したことを生活の中で積極的に生かそうとする男子もいる。いい方向に持って行きたい」という報告があり、「教育実習で小学校5年の男女を教えたが、男子のほうが積極的。どうして中学に行くとき変ってしまうのか」という発言もありました。

学びたいと思って出席しました。日頃考えておりますことがまちがっていなかったということが確かめられたことと、二学期にむけて、もう一度生徒の顔を思い出しながら、新しい計画をたて直す元気を与えていただきましたこと感謝いたします。たくさん収穫がありました。ありがとうございました。

◆ おしまいに話題になったのは「この頃の女子はひどい」、それは「家庭科教師の責任だ」「共学のせいだ」「女子に変な平等観がある」などといわれること。

「今まで女子は押さえられ過ぎていたからだ」「共修が悪いのではない。男女いっしょに、男と女の関係について教えていくべきだ」という意見が出ました。

◆ 最後に和田典子さんが「困難な中でも共修が進んでいるのは運動の正しさを実証するものです。共修のすすむ中で更にむずかしい新しい問題も出てきますが、現実をふまえた上で、未来あるこの事業をいっしょにすすめて行きましょう」とあいさつして閉会となりました。（梶谷 典子）

中学校技術・家庭科の
領域に関する男女生徒と
その親の希望と意識

姫路市立増位中学校
高寄 綾子

中学校技術・家庭科の領域の選択は、あいまいな点が多い。

そこで、生徒と父母の意識調査を実施し、履修領域決定の参考にしようと考えた。

調査は57年10月（食物Ⅰと木材加工Ⅰの共学学習後）及び58年5月（食物Ⅰと木材加工Ⅰの共学学習中）一年生男女生徒とその父母を対象に行なった。

本校は市の中心部からやや北にあり、校区は近年、ショッピングセンターやマンションなどのビルが建ち並び、新興住宅地として、発展しつつある。そのため、他府県からの転入も多く、生徒数も年々増加している。

★男子の家庭科、女子の技術科について

技術・家庭科に関する生徒の意識は「男子に家庭科」「女子に技術科」は不要とする者が多い。そして、女子は「男子にも家庭科が必要」とする者は男子に比べて多いが、「女子にも技術科が必要」とする者は男子と同程

度で少なく、「家庭科は男子も勉強すればよいが、技術科は女子にいらない」という意識が見られる。

★学習したいと選ぶ領域順位について

特に、順位の男女差の大きいものは、被服（女子一位―男子八位）電気（八位―二位）保育（四位―九位）である。金属加工（四位―五位）栽培（七位―六位）住居（六位―七位）は希望度が似ている。

父母は、生徒よりは各領域に対する学習希望が多く、被服（女子の親六位―男子の親二位）を除くと順位は男女生徒に対して差がない。

★技術・家庭科両領域のバランスについて
両領域を三個以上希望しているものは、生徒は $\frac{1}{3}$ 、親は80%である。

◆ 小学校で学習したことについては、男子30%、女子50%が小物づくり、野菜いためなどいろいろと具体的に記憶している。

◆ 兵庫県では、高校入試に思考力テストという独自の方法がとり入れられているため、受験対策として領域選択は広く浅くという傾向に流れやすい。現場教師の間でも、学習形態よりも領域の選択が関心事となっている。

学習希望領域の傾向（希望者数の順位）

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9
女生徒	・被服	・食物	木工	・保育	金工	栽培	60%以上 60%以下	電気	機械
男生徒	木工	電気	機械	金工	・食物	・住居	栽培	・被服	・保育
女子の親	・食物	・被服	木工	栽培	・住居	電気	75%以上 75%以下	金工	機械
男子の親	・食物	木工	栽培	・住居	電気	被服	機械	金工	・保育

・は家庭系列の領域

文部省も「共学の時代」と認める？ 最近の 状 勢 か ら

半田 たつ子

第十三期中央教育審議会（高村象平会長）には「教育内容等」小委員会が設けられて、昨年始めに始動。第一ラウンドでは今後の学校教育の在り方などをめぐって自由討議。第二ラウンドは昨年十一月からで、初等・中等教育における教科等のあり方について審議。今年五月からは第三ラウンドとして、各学校段階ごとの教育内容等について審議してきま

教授が、数か月にわたる審議結果を整理集約した中に、進路指導との関連をも考えた技術・家庭の見直しを持ち出されています（この教科は、いつも権力のご都合でくるくる変わらせます。また、高校の家庭一般が、差別撤廃条約批准とのかかわりで国際的にも問題になっているのに、参考人も呼ばないとは、どういふことなのでしょう）。

第二ラウンドでは、参考人を招き意見聴取を行ったのですが、家庭科に関する参考人は招かれていません。「職業・技術教育」として、唐津一・松下通信工業常務取締役、斎藤建次郎・宇都宮大教授が、三月十一日に呼ばれています。唐津氏は「小・中学校では物をつくる手ごたえや楽しさを教えてほしい。それが働く楽しさ、新しい仕事へのチャレンジ精神、創造性を養うことにつながる」と指摘。斎藤氏は「産業構造の変化に伴う高校職業教育を。普通科の体験学習では、旧制中学の作業科にみられるような科目設立も検討すべき」と提案しました。

第三ラウンドに入ってから、六月二十七日、中学校教育で検討すべき事項を、文部省遠山敦子中学校教育課長が提示。中学校の位置づけが第一に問題とされました。折しも、中曽根首相が私的諮問機関として設けた「文化と教育に関する懇談会」が六月十四日の初会合でスタート。早くも六・三・三制への批判や疑問が出ています。

中教審の「教育内容等」小委員会では、七月十一日には高校教育を取り上げ、共通必修をできるだけ抑え、選択科目を増やすことや普通科における職業教育について、問題提起がありました。中教審は、この後学習問題にも触れ、十月から中間報告まとめの審議を行い、十一月中旬までに決定、公表する段取り

です。第十三期中教審の任期はここまで、次期中教審が具体的な改革審議を行います。一方、日教組の委嘱を受けた第二次教育制度検討委員会（大田堯会長）も、教育改革のための最終報告で、中学・高校を接続した六年間の地域総合中等学校を創設、高校入試は行わないことを提案しています。文部省も六・三・三・四制の見直しに着手する方針を固め、七月二十二日、自民党文教部会、文教制度調査会合同会議で了承を得、プロジェクトチームを発足させました。軌を一にして学制改革に向けて動き出した感がありますが、その中で家庭科共修の行方は？

会では、中教審「教育内容等」委員会、「文化と教育に関する懇談会」に、私たちの運動の趣旨と現場の実践を知らせるために、資料を添え、技術・家庭の男女別学習領域指定を除き、家庭一般を男女共通必修とするよう要望書を送りました。

聞くところによると、大妻女子大学政学部長の名で「女子必修」固守の要望書が関係方面に出ているとのこと。また文部省が開いた全国家庭科教師の指導者養成講座で、津止教科調査官は、文部省は婦人問題で苦慮している。男女共学の時代だ。安閑としていられるのもそう長くない、と語ったとのこと。女子必修論者の中に、一種の危機感が芽生えている様子です。

国際婦人年日本大会の

決議を実現するための

連絡会報告

和田 典子

△年金問題について、厚生省への申し入れ▽

右のための学習会が6月24日、主婦会館で行なわれ、年金局の浅野史郎氏より、改正案の作業状況、問題になっていることがらなどについて解説を受けました。また、婦人の年金を中心に意見や要望を述べて閉会しました。これを受けて、関係六団体による起草委員会は案文をつくり、加盟団体の意見をまとめ、年金制度改正について左の要項を、さる七月、厚生省に申し入れました。

一、すべての婦人に固有の年金加入権ならびに年金受給権を保障すること。

●（婦人の固有の年金の加入権と受給権を立すること。）

●（パートタイマーの厚生年金加入を促進する方策をたてること。）

二、年金水準は、性別、配偶関係にかかわらず、最低生活を保障すること。

●（当面は、被用者年金の遺族年金を80%

に引き上げること。）

●（婦人労働者の年金の定額部分を引上げ老後独立の生計が営める水準にすること。）

●（年金の物価スライド基準は、毎年四月、少なくとも物価上昇率を上回るよう改訂すること。）

三、厚生年金の保険料率及び年金受給開始年齢の男女格差をなくすことに関する検討は、労働省と密接な関係を取り、慎重に対処すること。

●（定年と年金令の空白期間や男女差別定年制が現存し、男女同一賃金も実現していない今日、年金令だけ男女同一にすることは反対。）

●（女子の保険料率の引上げについては、現行の引き上げ以上の速度で行わないこと。）

四、厚生年金、国民年金、共済年金についても総合的に検討すること。

五、（年金制度について周知をはかること）

六、（年金制度の審議・立案に婦人を加えること）

以上（一）内は要約

なお、社会保険審議会厚生年金保険部会は、7月15日「制度改正に関する意見」をまとめました。

「連絡会」は、9月5日関係者の出席を求め、意見についての説明をきき、重ねて婦人団体としての要望を行う予定です。

△E S C A P会議について▽

「連絡会」が、かねてより申し入れていた「国連婦人の十年」一九八五年世界会議準備のためのエスカップ地域政府間会議を日本で開催することが決定しました。

この会議では「国連婦人の十年の諸目標実施の成果の見直しと評価をおこなうとともに、二〇〇〇年までの婦人の地位向上のための戦略や目標を達成するための実際的な措置が検討されることになっています。

「連絡会」では、民間代表を会議に加えるとともに、民間の立場から、参加者との交流をはかる機会がもてるよう外務省へ申し入れていますので、来春三月の開催にむけて、具体的準備をはじめることになり、関係団体を中心にして、実施プランを検討中です。

△優生保護法改訂問題のその後▽

現在、厚生省では「改正」にむけて審議会で審議中。また自民党の小委員会では「経済的理由」だけに限定せず「法の全面的見直しをはかる」ことになり、目下諸外国の状況などを調べたりしています。同時に地方議会に對しては「賛成決議」を出すことを見合わせるよう通達が出されたといいますが「改正」をとりやめにする気配はありません。

そこで「連絡会」では、有事にそなえて、来る10月6日午後1時30分より、公開シンポジウムを参議院議員会館でひらき、学習を深め、意志統一をはかることになりました。

世話人会報告

△六月四・五日▽

東京の世話人六人が、目黒みやこ荘に宿泊して、共修家庭科の内容を検討するため集まりました。今回は、高校「家庭一般」について考えることにしました。本来は、小・中・高と順に積みあげることが筋なのですが、既に小学は共修ですし中学は一部乗り入れが実施され、実践研究が現場で取り組まれている、今最も緊急度の高い高校をということで検討を始めました。

さて、どんな内容をとということでは、緊急度の高いもの、最低限必要なもの、中学までに必要な技術は終えておくという前提を確認して、①家庭とは家庭とは②よりよい生活のために③次の世代のために、という三つの柱をたてました。それぞれの中小項目までは割合スムーズでした。その先、男女共自立した生活のための最低限おさえること、役割分担を見なおすための学習などの具体的内容をというところに最も時間が費やされました。

検討しやすいようにと、視点を、移りかわり現状の点検、問題解決にむけてという三つに絞りました。こんな問題を考えさせたい、こんなことは入れたくないと、各自の日頃の生活体験などの中から意見はどんどん出されました。これをたたき台として世話人にお知らせし意見をいただいて、8月末再度練り直す予定にしました。しかし、行政側や多くの人々に共修の必要性を理解してもらうための教科内容の検討、体系化や表現方法がなかなかむつかしいもんだなあと思いました。

(芦谷 薫)

△六月一日▽

◎ 婦選会館より、6月20日までに荷物をまとめてほしい旨の通知あり、6月18日午後地下から4階まで移転作業を行なうことにする。

◎ 国際婦人年連絡会より、6月24日に厚生省の年金局担当者呼んで女性の年金についてヒアリングと常任会を行なうとのこと、半田さん出席の予定。

◎ 相変わらず、共修反対勢力の動きあり。静岡県の官制研究会で、指導主事、文部省担当官両方から、別学の強調。指導主事が教師一人一人とコンタクトをとり、家庭科教師同士

が団結できない、など。

◎ 男女共修家庭科の内容案、中間試案という形でもう少しまとめるため、次回世話人会へ継続審議。

(小田亜佐子)

△六月二五日▽

◎ 報告・決定事項

1. 会の和田さん、家庭生活問題研究協会に招かれ、共修「家庭一般」の内容について話をした。同協会では、新しい「家庭一般」の内容について48団体に報告することのこと。

一方、48団体では、家庭科についての部会を持ち、そこで検討してほしいということ。

2. 48団体の動き

84年エスカップにどのように参加するかについて話し合った。それと、年金問題について、要望書を出す。

3. 「家庭科、男子にも」ドメスから再刷の予定。皆様の協力のおかげです。

4. 「技術教室」に投稿、一般の人たちに理解してもらう。

5. P・T・A全国大会にチラシをまく。

6. 新しい文教委員が決まったら面会に行く。

7. 中曽根首相の私的諮問機関へ手紙を送る。

8. 今年の交流会パンフを作る。

9. 中教審事務局へ、実践例、オレンジ・ピンクパンフにコメントを付けて送る。

◎ 話し合い

「家庭一般」内容試案について話し合ったが、時間切れのため、8月末、もう一度検討。

(八島 紀子)

△七月二三日▽

一、東京都婦人問題解決のための新東京都行動計画—昭和五八年度実施細目説明会への参加要請……誰も出席出来ず。

二、消費者大会のスローガンに男女共修を入れてもらうことについて、ひきつづき小田さんに参加をお願いする。

三、母親大会(中嶋)女性史交流会(芦谷、中嶋)全国女子教育研究会でのパンフ販売について

四、中曽根首相の私的諮問機関「文化と教育に関する懇談会」への要望書検討

五、八月四日の全国交流会での役割分担を決める。

六、資料を入れるための封筒を印刷すること。

七、秋の授業参観を埼玉県立高校に問合わせること。

(中嶋 里美)

△八月四日▽

第三回全国交流会に引き続きみやこ荘で開きました。

★第二回全国交流会の報告をまとめパンフレットにすることを決めました。

ピンクパンフ「技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか」の在庫が少なくなってきたこともあり、ピンクパンフにかわるもの、という方向で作ります。

新パンフ原案担当—持田

★83年度の運動内容の一つである高校実態調査と同時に中学校でも調査を行う。

★新しい学校制度検討委員会ができた要望書を出す。

(馬場 洋子)

△八月三一日▽

六月四・五日の合宿世話人会にひきつづいて、共修家庭科の教育内容についての第二回検討会を八月三十一日の終日にかけて、おこないました。そのなかで、高校「家庭一般」だけではなく、中学校「技術・家庭科」とあわせて考える必要があるということになり、中学・高校一貫の「男女共通必修家庭科の内容」を検討し、第一次試案としてまとめてみました。

(和田 典子)

△九月三日▽

▼少々遅刻の中嶋さん、部屋に入るなり「ニュースをお伝えします」。文部省の担当官が「家庭科は男女共学の時代」と発言したとのこと(16ページ参照)。ほかにももう知っている人もいてひとしきりその話。共修反対運動を盛り上げようという意図からの発言ともとれるが、状況が大きく変っていることは確か。学制改革の問題も出て来ていることだし、運動も新しい展開が必要ではないか、と話し合いました。

▼決定したこと

◆入会申し込み用紙と黄パンフの残りが少なくなったが、もう少し状況をみてから新しいものをつくる。

◆ESCAPの会議(9ページ参照)のとき、民間女性が交流する機会をぜひつくるよう要望する。5人位の労力、5万円位のお金は提供してもよい。

◆新しい会員名簿は冬号に同封する。

◆共修家庭科教育内容第一次試案(12ページ参照)。三十一日にまとめたものを修正、決定。

▼検討したこと

◆授業参観について。

(梶谷 典子)

男女共修 家庭科教育内容 第一次試案

世話人会

前号でお知らせしましたように、今年度は共修家庭科の内容について、会として積極的に検討をすすめることになりました。九月三日の世話人会で第一次試案をまとめましたのでおしらせします。まだ簡単な項目だけですが、これから皆様のご意見をいただいて充実したものにしたいと思います。

本来、小・中・高一貫したものとして考えるべきですが、とりあえず、小学校については現状のままと考えて、中学校「技術・家庭」の家庭系列及び高校「家庭一般」の内容をまとめました。

中学校「技術・家庭」 家庭系列の内容

- 1 健康な食生活
 - (1) 炭水化物と人間のからだ
 - (2) 炭水化物系食品の特徴と食べ方——実

習を含む

- (3) たんぱく質・脂質と人間のからだ
- (4) たんぱく質・脂質系食品の特徴と食べ方——実習を含む
- (5) 食品の生産、流通の現状と問題点
- (6) 伝統的な食文化に学ぶ
- (7) 今後の食生活のあり方
- 2 健康な衣生活
 - (1) 人体と衣服材料
 - (2) 動物性繊維——羊毛を中心に（もめん）の学習は小学校で行う
 - (3) 編みものの原理——製作を含む（縫い方の基本、織りものの原理は小学校で学習する）
 - (4) 洗たくの原理と洗剤
 - (5) 人体と衣服の構造——製作を含む
- 3 健康な住生活
 - (1) 住まいの機能と間取り
 - (2) 住まいの方の原則
 - (3) 住まいの現状と問題点——個別の住宅を中心に
 - (4) 住まいと環境
- 4 男女の関係と家族
 - (1) 男女の関係の現状と問題点
 - (2) 男女の性のしくみと働き
 - (3) 青春期の男女の関係

- (4) わたしの生育史
- (5) 家族とわたし



★以上は学習の順序を示すものではありません。

★個別の家庭生活を営む上で必要な知識、技能は、中学段階までに身につけるべきものと考えました。

★家庭系列と技術系列は一本化せず、二本立てにすべきだと考えて、ここでは家庭系列だけ取り上げています。

★「健康な」ということばを使うことについては、障害者問題にかかわって来られた方がたから疑問も出されていますが、皆さまはどうお考えでしょうか。これにかわるよい表現があるでしょうか。ご意見をおしらせください。

高等学校「家庭一般」の内容

- 導入 現代家族・家庭の現状と問題点
- 1 家族・家庭
 - (1) 家族の移り変わり
 - (2) 家庭生活と法律
 - (3) 家庭生活と職業

2 家事労働

3 家庭生活と衣食住

- (1) 食生活
 - ①移り変わり
 - ②現状と問題点
 - ③今後の課題
- (2) 住生活
 - ①移り変わり
 - ②現状と問題点
 - ③今後——住宅政策などを含めて
- (3) 衣生活
 - ①移り変わり
 - ②現状と問題点
 - ③今後の課題

4 生命の育成

- (1) 愛と性の現状
- (2) 母性と父性
- (3) 妊娠と出産
- (4) 子どもの心身の発達
- (5) 子どもと社会

5 今後の課題

- (1) 家庭生活と人間関係
- (2) 家庭生活と地域社会
- (3) 家庭生活と社会福祉
- (4) これからどう生きるか

・これらの項目に書き加える解説——ねらい、留意点など——についても更にこまかく考えて行く予定です。

・この項目についてのご意見を、郵便で事務局までおしらせください。あるいは、世話人にご連絡ください。

他団体では

第18回

家庭科教育研究者連盟
夏季研究集会のようす

和田 典子

△そのあらまし▽

北海道登別温泉に約二五〇名が集って、いのちとくらしを守る家庭科教育・をメインテーマに7月29・30・31の三日間、ひらかれ熱っぽい討議をくりひろげました。

記念講演は、布施晶子氏の「家庭崩壊の危機と再生の方向」、五本の基礎講座は、

- ①家庭科で何をどう教えるか
- ②北海道の開拓と女性
- ③臨調・とわしたちのくらし
- ④青少年問題と教育
- ⑤実技講座——男女共学の衣教材（パンツ）でした。

そのあと、35篇の実践報告をもとに分散会にわかれて、次の柱をテーマに話し合いをすすめました。

a 家族・家庭の破壊の実態を明らかにし、その背景をさぐる。

b aをふまえて、家庭科教育ではどこにどう切りこんでいったらよいか。

c bにてらして、教科書・学習指導要領の問題点をさぐるとともに、教科書をめぐる政府の政策意図をあきらかにする。

d 政府の家庭、教育政策の動向や国民生活の「あたらしい貧困化」、子どもたちの生活基盤のくずれ、心身の発達のゆがみなどの情勢をふまえて、男女共学の今日的意義をあきらかにし、実践の展望をつかむ。

最終日の全体討議では、いのちとくらしの危機をむかえている「夕張」で、住民とともに生活を守るためにたたかっている会員から報告をうけたあと、

e いま、家庭科教師は何をなすべきかについて、教師としてだけでなく、親として、住民として、働く者として何をしているか、これからどう生きていくかなどについて話し合い、大会の幕を閉じました。

子づれ、夫づれの参加者も多く家族ぐるみの研修会で、保育室利用の子どもは16名にのぼりました。

△男女共学の状況▽

男女共学の実践が、特に中学校ですすみ、共学の実践が、大会参加のきっかけになった人も少なくありませんでした。しかし高校では「共学にすれば選択になる」と指導主事からおどかされている、といった報告もあとをたらず、情勢のきびしさは変わっていませんでした。それにもかかわらず、共学の実践校は着実にふえている事実は、何にもまして参加者へのはげましになりました。

母親大会から

中嶋 里美

去る七月三〇日、日本教育会館で開催された第二九回日本母親大会問題別集会「女性の生きがいとはたらく権利」に参加してきました。三階大ホールを埋めつくす参加者、各方

面からの問題提起に大いに触発されました。

銀行は今第二次オンライン化がすすみパートが半数以上導入されていること。新しい職業病としてワープロのテレビ画面をみつづけることによる目の障害や、妊娠障害、商店で働く婦人達の長時間労働、パート労働者がさまざまな差別に泣き入りしないようにするための「パート一〇番」の活動内容、鈴鹿市の山本和子さんの最高裁への訴え、島根県の女教師が退職勧告を拒否したところ、僻地へ転々とさせられたこと等々の報告がありました。なかでも埼玉の富士見市で公民館活動をしている人からの「自立とは自分で物事を考え行動していくことではないか、単に経済的な自立だけでは足りない」という実践報告は、人間の精神的自立も周囲の偏見と闘う中でしか確立されないということを示唆していました。

女性史研究全国交流会

芦谷 薫

8月6・7日と神奈川婦人総合センターで第三回目の集会がありました。今回初めて、学校教育の中でという分科会が設けられ、30名余りが報告や意見交換をしました。明星高校における男女共学の生活科ができる過程と、

家族史についての報告、日本史の中に女性史をどう組み込んだかという報告がありました。

母と女教師の会全国集会

芦谷 薫

8月8・9日東京でありました。ここでも「家庭科男女共学を実現するために」という分科会が今年初めて出来ました。教師どうしや父母との連携協力が大きな力となることを望んでいる私にとって、こんな場がとても魅力的に思えたのですが、母親として参加された方はたった一人でした。しかし、小・中・高の家庭科の教師や他教科の教師が集って共修の実情や何が共修を阻んでいるのか等話し合いました。助言者の村田泰彦先生の話の中で「法令には『男女共学をしてはいけない』という記述は何もない。『昔は、中学の男子むき女子むき技術・家庭を社会・通念という理由で文部省は説明していたが、もはや文部省も社会通念とは言えなくなってきた。』」「時期尚早、男子に教えた経験ない、中学で完全実施されていないのといった論は教育者としての見識の問題としてとらえ反論できる力量と内容を」ということを聞いて、エネルギーをかきたてて帰られた方も多かったこ

とと思いました。

どちらの集会にも、一問一答、グリーン、ピンク、オレンジのパンフや、「家庭科、なぜ女だけ」「家庭科、男子にも」「新しい家庭科We」をもっていききましたが、好評でした。

We から

長谷川 公一
(Weの会世話人)

Weもピカピカ二年生

「新しい家庭科We」もすでに十五冊。

全国から一七〇名が参加したはじめての夏期フォーラムを終えて、二年目も折返点をすぎました。愛読者の胸のうちでは、言葉にはつくせないWeらしさ、イメージがふくらみつつあるのではないのでしょうか。「軽・薄・短・小」の風潮のなかで、薄い小さな雑誌は、心ある人々にとって、大きく重い存在になろうとしています。

Weは何を提起してきたのか、個性はどこなのか、あえて整理すれば、こんな風にいえるでしょうか。①自立とともに「共に生きる」こと、共同と支えあい、自然との共生を基本テーマとしていること。②学校教育のかかえる問題を「新しい家庭科」の視角からのりこ

えようとしていること、とくに学校を地域社会に開かれた場としてよみがえらせ、子どもたちを活性化するさまざまな授業の試みと報告。そうして③地域の生活者・市民と小・中・高・大の一般の教師、家庭科担当の教師が、職業や性別、世代、専門の枠をこえて、問題を提起し、考えあい、交流する場であること。

各地にひろがる「Weの読者会」「Weの会」公開ゼミナール・フォーラムなどの一層の充実、誌面の魅力とともに今後のカギといえるでしょう。この八・九月号の発送時で、予約購読数は三六〇〇部。読者数の拡大と予約の着実な更新によって、Weも「体力増進」に努めねばなりません。活字の大きさ、読みやすさ、発送作業のボランティア、読者会のもち方など、二年目ではつきりしてきた検討課題も少なくありません。

三年目、四年目……と、Weはどこまで大きく、重いものとなることができるでしょうか。Weの成長は、家庭科のひろがり可能性、私たちがもちうる包容力とコミュニケーションの力、こうした力の試金石ではないでしょうか。

Weのパンフレットができました
開けて楽しく、ビジュアルなパンフレット
「新しい家庭科Weって何？」ができました。

三月五日の公開ゼミナールを中心に、イラストを駆使して、Weの活動を紹介した、芦谷薫・小田亜佐子両氏の力作です。頒価は二〇〇円、申込はウイ書房気付「Weの会」(六三二六―一三八〇)まで。

東京と大阪で

アジア地区家政学セミナー

九月六日から九日まで、十ヶ国が参加して開かれ、世話人の木村治美さんが男女共修家庭科の必要性和推進に関して報告されました。(編集部)

PTA全国研究大会は見送り

毎年、日本PTA全国協議会の行っている全国研究大会は、今年徳島市で開催されました。世話人会では今年もアピール文を配るなどの行動を行いたいと話し合い、徳島県とその近隣県の会員に問い合わせましたが、望みの徳島県内の会員は九州に転居し、また、近隣県の会員も徳島県の方へのつてもなく、残念ながら見送りました。名簿を見てお友達に声をかけて各地の会員の数をもっと増やし、各地の情勢や催しに対応しましょう。(青山 和世)

事務局・プロフィール

桑原 芳子

新宿駅から徒歩7分、都心とは思えない静けさの中に「婦選会館」は大きな存在感をもって建っています。メインストリートから数十米奥へ・私の大好きな小道のつきあたりにあるのです。名もなく小さくそっと咲く花、緑をいっぱいひろげる雑草、実生の銀杏の小さな木、それらをやさしくつつむ、土の道、それが「婦選会館」への道です。

その「婦選会館」の中に事務局は席をおいています。玄関を入った左側に備え付けられたいくつものポストの一つに、家庭科の男女共修をすすめる会、の白い名札があります。皆様からのお便り、会費納入の振込用紙、他機関・団体からの交流通知などがそこに収められるのです。このポストこそ事務局といっ

てよいでしょう。あとは、地下閲覧室の片隅におかれた小さな机がお城でしたから。
でも、今秋、11月をめざして始められた婦選会館・増改築工事により、一室与えていただけることになりました。唯今、工事の最中です。婦選会館四階に三畳ほどの広さの事務局が誕生するはず。新装事務局の様子は、またお知らせいたしましょう。おたのし

みに。

皆様の御近況、共修をすすめる会への御意見、資料の御請求など、ポストはお待ちしています。御住所変更の通知もよろしく。

◇ ◇ ◇

【資料紹介】

◆性教育教材

会員の北沢杏子さんから、手紙を添えて、一冊の絵本と三冊のスライド用台本が届きました。そこで、その手紙を紹介します。

「昨年はスライド『ぼくとわたしの初潮教育』と『正しく知ろう避妊』（ともに男女共修用）、今年はビデオ『いっしょに初潮教育』と『あかちゃんが生まれる話』を製作しました。これらは、私が行った男女共修の公開授業から収録、編集したものです。

本年九月以降に正しく知ろうシリーズとして『妊娠』、『出産』を製作したいと思っています。台本を書く段階で、会員の方々の意見を頂けるとありがたいと思います。必ずしも家庭科の先生でなくてもよいのです。一昨年、東京都の家庭科の先生（高校）の研究会に講師に行きましたが、先生方自身の（特に先輩の方の）意識に問題があると思いました。会員の方なら、そんなことはないのでしょうかが……。

産休や育児休暇、結婚、離婚についても教材を作っていきたいと思っています。共修で魅力のあるスライドにしたいので、よろしく御協力ください」ということです。是非、左記にご意見をどうぞ。

アーニ出版 北沢杏子さん宛

〒158 東京都世田谷区上用賀四一二二一三

電話番号

〇三―四二五―三二四六

なお、届いたスライドの台本は「ぼくとわたしの初潮教育」と「避妊」と「男子の性心理、女子の性心理」の三冊と、絵本「こんにちは／しょちゃんさん」の一冊です。

（青山 和世）

◆寄贈本

中絶禁止への反問

・悲しみを載けますか、

社団法人 日本家族計画連盟（会長 加藤

シズエ）では「改正」法案が国会で論じられるときに備えて、この度、左の単行本を編集、

人間の科学者から発行されました。内容は

◆わたしにとって中絶とは（手記）

◆中絶は法で罰すべきか（座談会）

◆現場からのレポート（11篇）

◆資料

A5版 三三二ページ 九八〇円

連絡先電話 〇三・二六九・二二〇一

（和田 典子）